

# チュルチュアパ遺跡出土の7バクトウンの石碑片について

伊 藤 伸 幸

## 1. はじめに

2018年3月4日に、チュルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で（図1）、古代メソアメリカ文明で確認されているもっとも古い日付7バクトウンが記録された石碑片が出土した。メソアメリカで、7バクトウンの日付を持つ石碑は4例しかない。また、7バクトウンより古い長期暦の日付は見つかっていない。

先行研究では、6バクトウンの可能性を指摘する研究者もいる（Edmonson, 1988; Graham

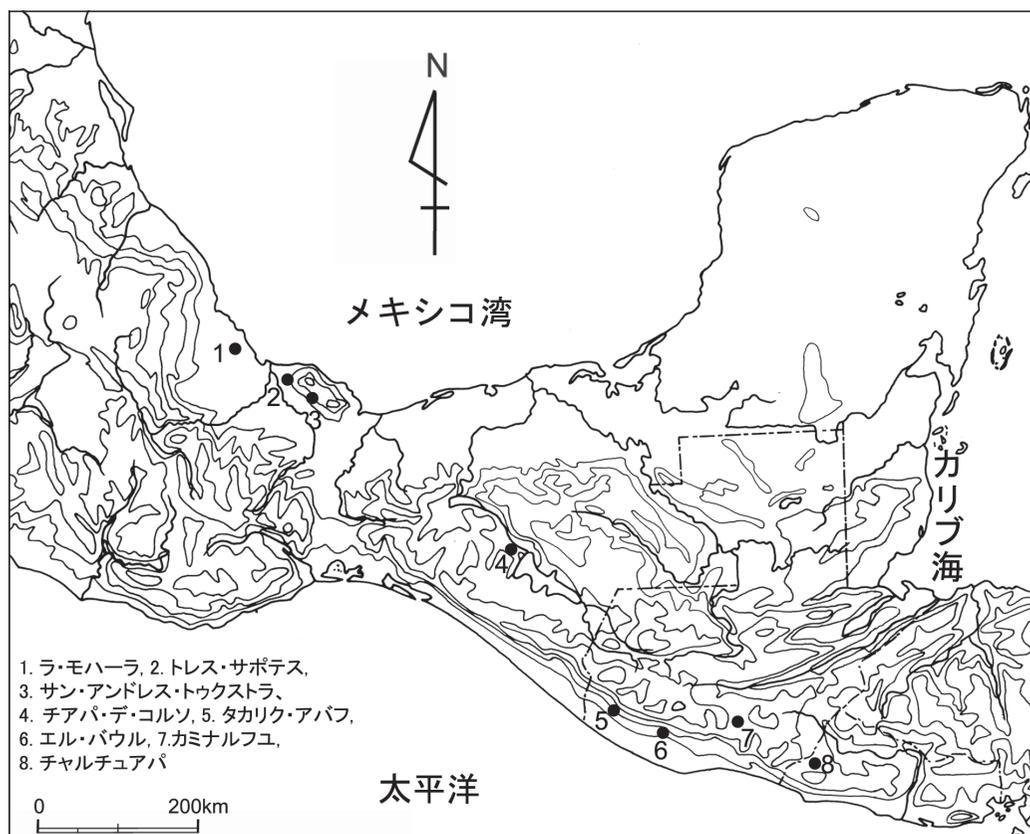


図1 先古典期後期の長期暦が出土した遺跡と関連する遺跡

表1 メソアメリカで出土した先古典期後期の日付を持つ石彫

遺跡	石彫	長期暦の日付	260日暦	西暦
チャルチュアパ	石碑片	7. — — — —	—	? ?
チアパ・デ・コルソ	2号石碑	7.16. 3. 2.13	6ベン	紀元前 35年
トレス・サポテス	C石碑	7.16. 6.16.18	6エツナブ	紀元前 32年
エル・パウル	1号石碑	7.18.14. 8.12	12エツブ	紀元後 16年
		7.19. 7. 8.12	12エツブ	紀元後 29年
		7.19.13. 7.12	12エツブ	紀元後 36年
タカリク・アバフ	5号石碑 (b1)	8. 2. 2.10. 5	—	紀元後 83年
	5号石碑 (b2)	8. 3. 2.10. 5	—	紀元後103年
ダンバートン・オークス所蔵石斧		8. 4. 0. 0. 0	—	紀元後120年
タカリク・アバフ	5号石碑 (a)	8. 4. 5.17.11	—	紀元後126年
ラ・モハーラ	1号石碑 (1)	8. 5. 3. 3. 5	13チクチャン	紀元後140年
	1号石碑 (2)	8. 5.16. 9. 7	5マニック	紀元後156年
タカリク・アバフ	2号石碑	8. 6. — — —	—	紀元後16?年
トゥクストラ	小石像	8. 6. 2. 4.17	8カーバン	紀元後162年
ハーバーク石碑		8. 8. 0. 7. 0	3アハウ	紀元後199年

(注) 先行研究 (Riese, 1988; Schele & Miller, 1986; Stirling, 1940; Winfield C., 1988他) を参考に作成した。

and Porter, 1989)。また、マヤ低地で紀元前400年まで遡る可能性がある文字もしくは日付が報告されている (Saturno, et al., 2006; Giron-Ábrego, 2013)。しかし、本稿では、今までに認められている長期暦の日付7バクトゥンの事例に限定し、チャルチュアパ遺跡出土石碑片と比較する。そして、この石碑片が古代メソアメリカ南東部太平洋側の端でみつかったことの意味を考察する。

最初に、メソアメリカの長期暦の最古の日付である7バクトゥンに関する先行研究の概略をまとめる。次に、チャルチュアパ遺跡における7バクトゥンの日付を持つ石碑片の出土状況を検討する。最後に、エルサルバドル西部でみつかった石碑片のメソアメリカ史における意味を考察する。

## 2. 古代メソアメリカの7バクトゥンの日付を持つ石碑

### (1) 長期暦7バクトゥンの日付

古代メソアメリカでは、紀元前3114年8月14日に始まった、約400年が一周期となる長期暦がある (Coe and Houston, 2015)。しかし、この暦で記録された日付は7周期目である7バクトゥンが最古で、4例のみしかない (図1、表1)。一方、7バクトゥンの日付が記された

場合でも、7バクトウンの時期につくられたものでないこともある。例えば、コパンでは、古典期後期の碑文（祭壇 I）に7.1.13.15.0（9アハウ13クムク）の日付が記されている（Stuart, 2004）。本稿では、先学によって7バクトウンの時期に刻まれたと考えられている事例を検討する。

7バクトウンとされる日付を持つ石碑は、北から、メキシコ湾岸のトレス・サポテス遺跡 C 石碑、南東部太平洋側メキシコのチアパス高地にあるチアパ・デ・コロソ遺跡 2 号石碑、グアテマラ太平洋岸エル・バウル遺跡 1 号石碑、そして、エルサルバドル西部高地に位置するチャルチュアパ遺跡で出土した石碑片である（図 2、3、写真 1、2）。一方、タカリク・アバフ 2 号石碑は、数年前まで7バクトウンの日付を持っているとされていた。5を示す横棒の上にある1を表す点が2単位ではなく3単位あることが判明し、8バクトウンとされる（図 2 a; Graham, et al., 1978; Orrego, 1990; Schieber de Lavarreda y Orrego Corzo, 2013: 922）。このため、本稿では、タカリク・アバフ 2 号石碑を7バクトウンでなく8バクトウンとして扱う。

## (2) 7バクトウンの3つの事例

ここでは、今までに確認されているチャルチュアパ出土石碑片以外の3例について検討する。

3例の中では、エル・バウル遺跡 1 号石碑が最も早く報告されている（図 2 a）。レーマンは1926年の論文で、エル・バウル遺跡調査を記している。そのなかで、エレーラ石彫（エル・バウル 1 号石碑）は、その時点まで知られているマヤ碑文の中で最も古い長期暦の日付を持つと述べている。また、長期暦の日付は7.19.7.8.12（12エップ20カンキン若しくは12シミ）としている。しかし、エップの文字はマヤというよりもメキシコの文字（マリナリ）に似ている（Lehman, 1926）。一方、ウォーターマンによれば、これまで知られているマヤの日付は8～10バクトウンのものであり、もしレーマンが正しいならば新世界で最も古い碑文であるが、石碑に彫られた人物と日の文字（エップ若しくはマリナリ）はアステカ文化に属している。人物は、アステカとユカタン北部を除けば、マヤとの類似点は見られない。アステカの文字マリナリはマヤでの表現と異なると指摘している。そして、コパンやキリグアの石碑のある種の模倣品と考えている。また、この石碑は、低い建造物の横から出土したと報告している（Waterman, 1924, 1929）。一方、コウは、その時まで撮影された写真を分析し、7.19.15.7.12の日付を提示している（Coe, 1957: 603）。マーカスは、プロスコリアコフの提示している7.18.14.8.12とコウとレーマンが提示した3つの可能性のうちでは、レーマン以外の2つの可能性が高いとしている（Marcus, 1976）。

次にみつかったのは、トレス・サポテス遺跡 C 石碑である（図 3 a、写真 1 c, d）。スターリングは、出土した時点では、紀元前291年に相当するとした。また、日付が彫られた面の反対面には、初期の雨神が表現されていると考えている。この石碑は、C 建造物群の C1 建造物の

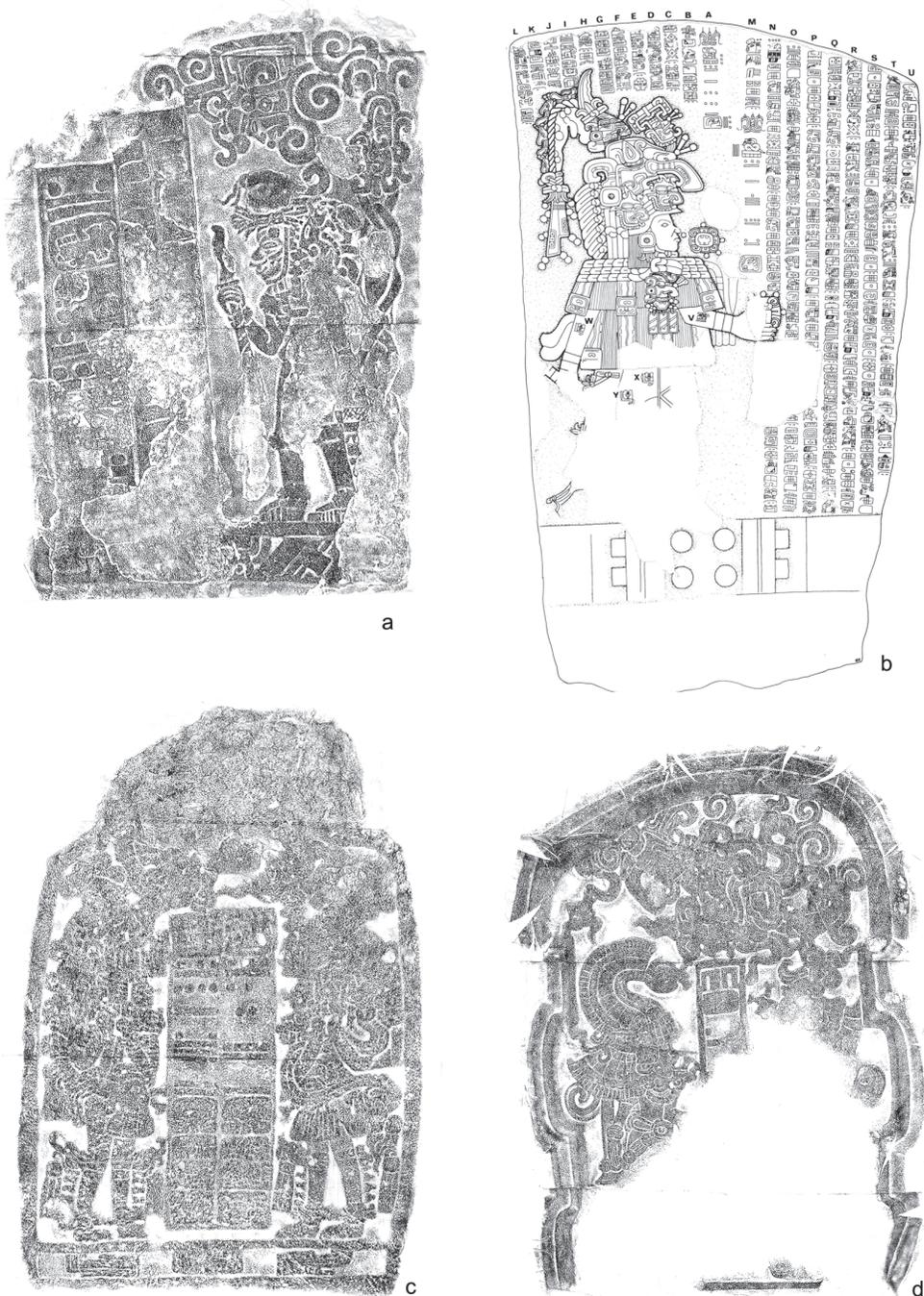


図2 先古典期後期の長期暦の日付がある石碑

a. エル・バウル遺跡1号石碑拓影、b. ラ・モハーラ遺跡1号石碑、c. タカリク・アバフ遺跡5号石碑拓影、d. タカリク・アバフ遺跡2号石碑拓影 (b. Winfield Capitaine, 1988, figura 7を改変)

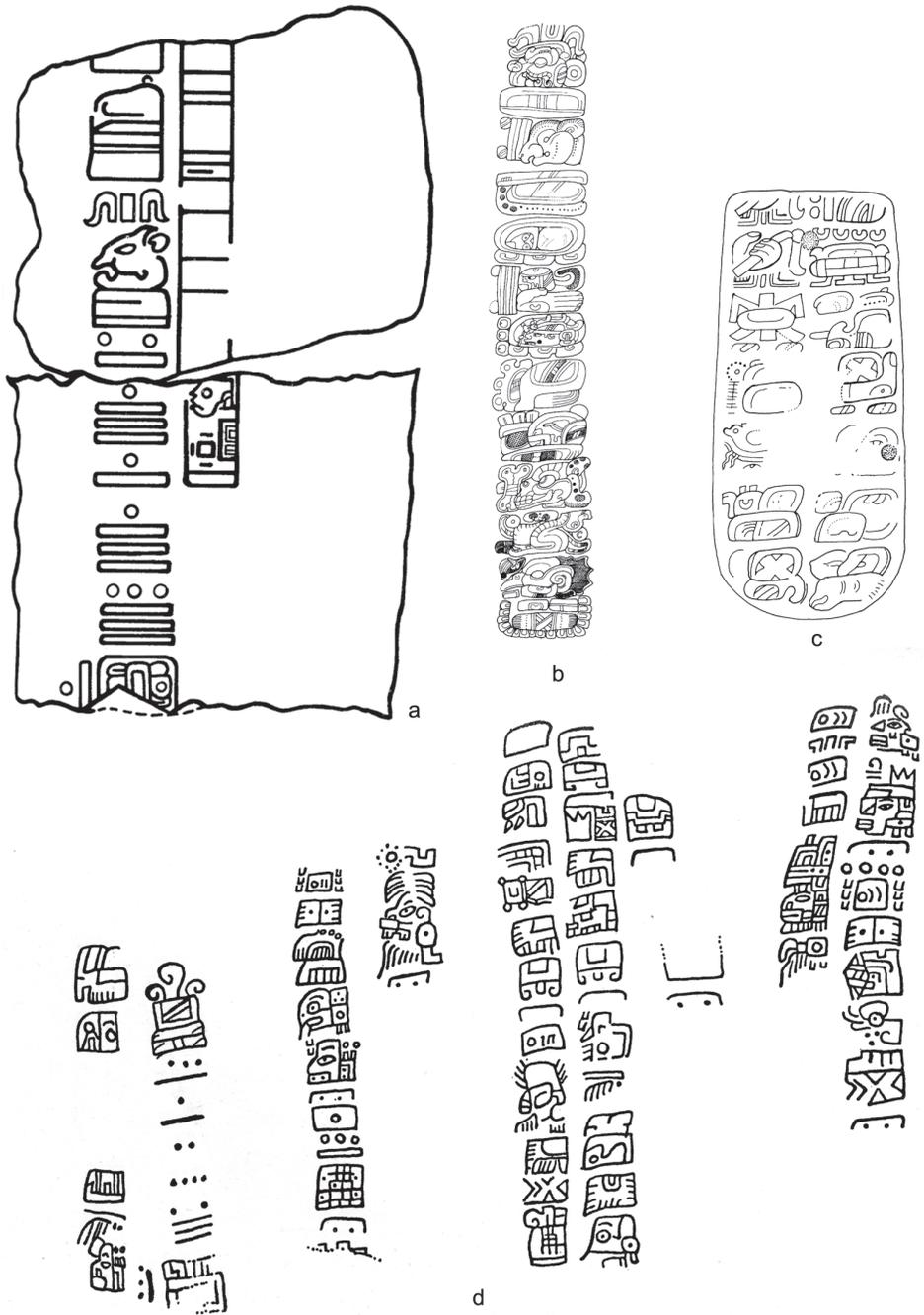


図3 先古典期後期の長期暦の日付がある碑文

- a. トレス・サボテス遺跡C石碑、b. ハーバーク石碑、c. ダンバートン・オークス所蔵石斧、  
 d. トゥクストラ小石像 (a. Marcus, 1992, fig. 4.29; b, c. Schele and Miller, 1986, pl. 22, 66を改変)

南端で、円形祭壇と共に出土したと報告している (Stirling, 1939)。この時に出土したのは、長期暦のイニシャルシリーズを示す導入文字のない部分の破片であり、バクトゥンに相当する数字も無かった。16.6.16.18 (6 エツナブ 1 ウォ) とし、バクトゥンに相当する数字は7を提案している。また、この日付が示す時期が正しいのかを、関連する遺物などから検討している。出土土器はワシャクトゥン IA・B やモンテ・アルバン I・II の土器に類似している。C 石碑の反対面に彫られた仮面とワシャクトゥン E-VIII sub 建造物の仮面の特徴に共通点がある。更に、エル・バウル 1 号石碑、トゥクストラ小石像他の 7~8 バクトゥンの日付のある考古資料を比較し、トゥクストラ小石像に様式が似ているとしている (Stirling, 1940)。1969年、C 石碑の上部破片が、近くの住民エステバン・サントが発見した。この破片に導入文字とバクトゥンに対する数字7が彫られていた。ベベリドが調査し、コバルピアス石碑と命名した。この石碑も 3 号建造物群から 3 km 以内に位置している (de la Fuente, 1973)。また、C 石碑は 7.16.6.16.18 (6 エツナブ 1 ウォ) の日付であり、導入文字に示されるジャガーはポップ月の守護神とされる (Marcus, 1976)。

3 番目に見つかったのは、チアパ・デ・コルソ遺跡の 2 号石碑である (写真 2 a)。1961年の発掘で、5b 建造物の表土層から石碑破片 5 点が出土した。このうちの 1 点に長期暦が彫られていた。導入文字とバクトゥンに相当する数字を欠いていたが、ロウは 2 号石碑に彫られた長期暦の日付に 3 つの可能性 (6.10.3.2.13; 7.16.3.2.13; 9.15.3.2.13) を提示した。石彫が持つ様式から、2 番目の 7 バクトゥンの日付の可能性が高いと考えている。また、元の場所から動かされ意図的に壊され、古典期前・中期に 5b 建造物最後の増築の際に建物の充填材となったとしている (Lowe, 1961)。

### (3) 7バクトゥンに関する先行研究

7 バクトゥンの石碑の日付は、前述のエル・バウル 1 号石碑のように、研究者に受け入れられない時期もあった。以下に、先行研究の概略をまとめる。

トンプソンは、1941年の論文で、記念碑的石彫をマヤと非マヤに分類し、非マヤの記念碑的石彫を紀元後 1200 年頃の文化交流の産物とすることを提案している。このなかで、エル・バウル、トレス・サポテスなどの石彫の日付を検討している。エル・バウル 1 号石碑については、イニシャルシリーズの導入文字も 365 日暦の日付もなく、文字はオアハカのサポテカ文字に似ている。4 アハウ 8 クムクに始まるイニシャルシリーズではなく、セカンダリーシリーズ (長期暦の日付を起点とした日付) に近いと指摘している。そして、ナワ系のピピル族の移動によって、グアテマラ太平洋岸に広がったとして、紀元後 1200 年頃のものとしている (Thompson, 1941)。

コウは、1957年の論文で 7 バクトゥンの日付を再考している。石彫の様式などから、トレス・サポテス、エル・バウル、タカリク・アバフ (コロンバ) の石彫は、先古典期と考えられ、長期暦を彫った記念物を建立する習慣はオルメカ文化で始まり、グアテマラまで広がった

としている (Coe, 1957)。また、チアパ・デ・コルソ遺跡2号石碑の発見後、マヤ文字の歴史を検討し、紀元前1世紀後半に出現したと考えている (Coe, 1976)。

アヤラは、太平洋側の文字に注目し、マヤ文字の発展史をまとめた。その中で、先古典期中期に文字がオアハカで生まれ、太平洋側地域を通して、モンテ・アルバンの暦を基としてイニシャルシリーズが発展し、マヤ地方に至ったと考えた (Ayala, 1983)。

以上をまとめる。研究初期の頃には、先に見つかっていたマヤの長期暦が8～10周期のために、それよりも古い7周期目の長期暦の日付はイニシャルシリーズの日付と認められず、後代の模倣品とされた。しかし、石彫の様式研究の進展により、7周期目の長期暦の日付が最古であると認識されるようになった。

### 3. チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土の7バクトウンの彫られた石碑片

チャルチュアパ遺跡は、古代メソアメリカの地域区分では南東部太平洋側に位置する。当該

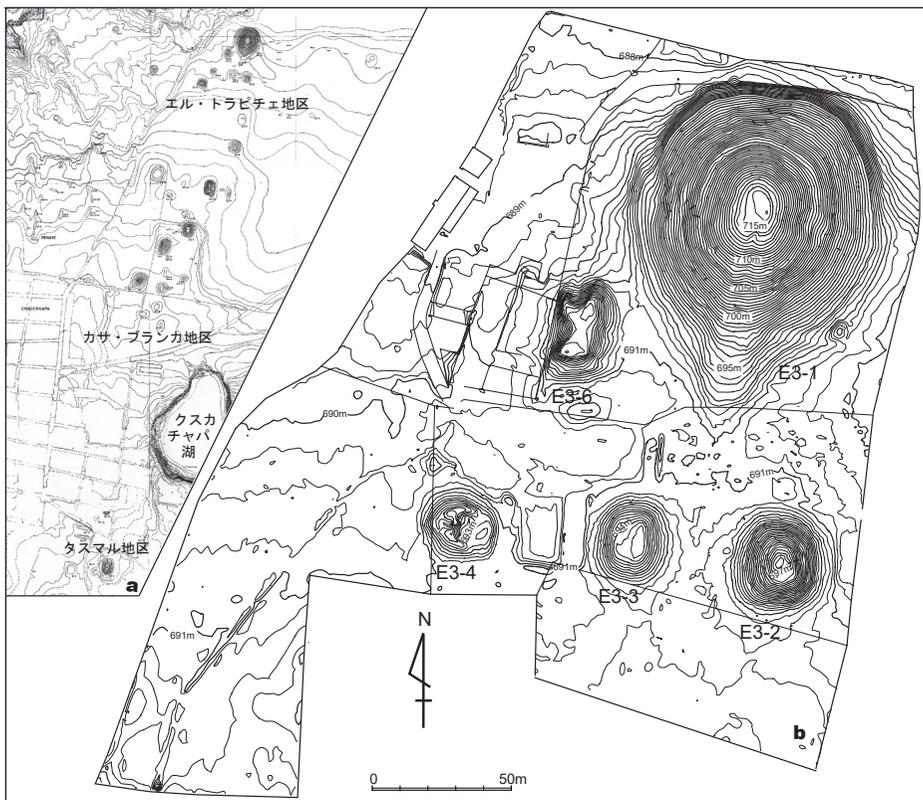


図4 チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区

a. チャルチュアパ遺跡、b. サン・アントニオ コーヒー園調査地区測量図

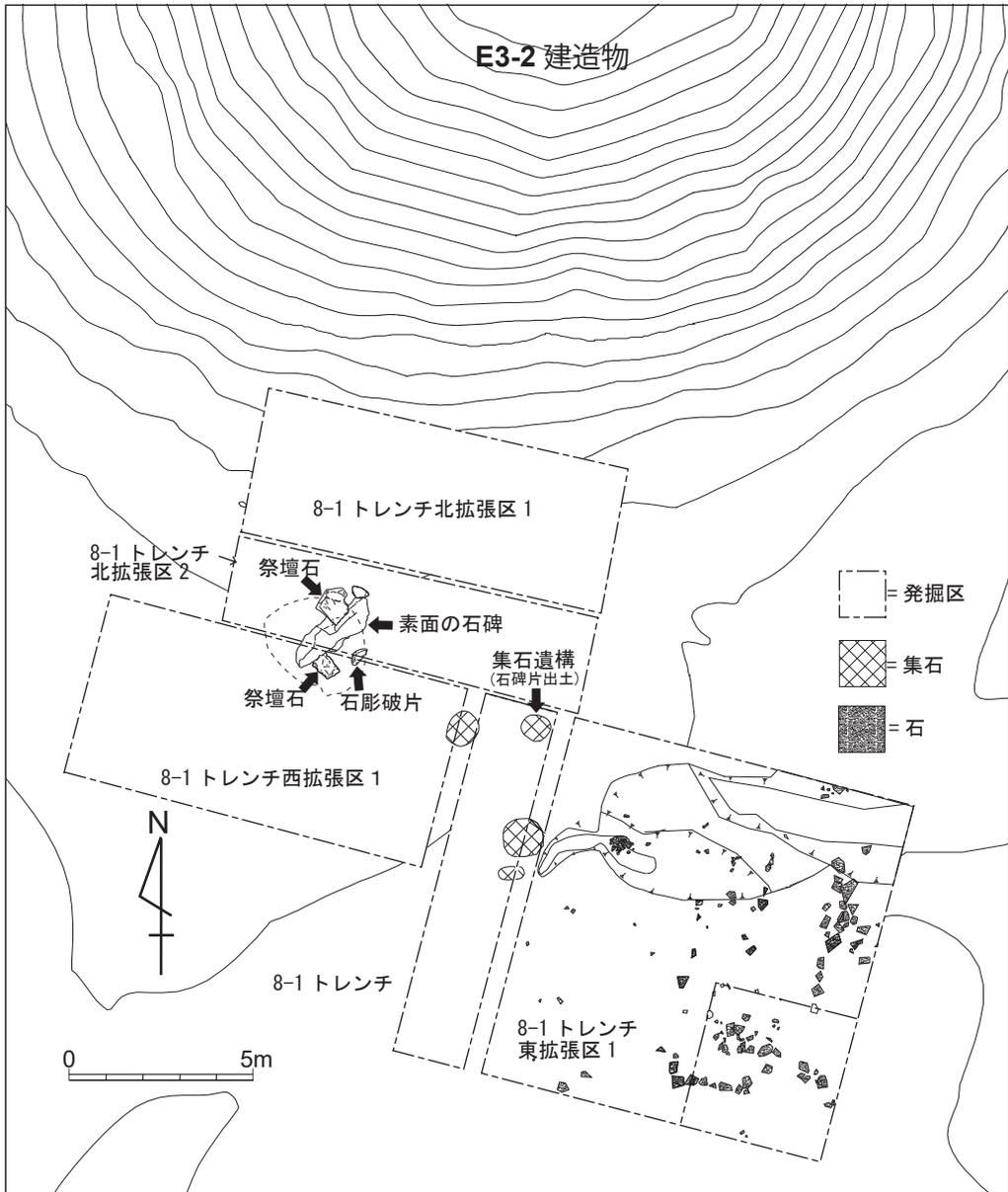


図5 エル・トラピチェ地区 E3-2南側調査区

地域は、古代メソアメリカでは最も南に位置する地方である（図1）。チャルチュアパは、先古典期前期（紀元前1000年～）から後古典期、そして、現在まで継続して居住されている。また、エル・トラピチェ地区は、先古典期前期に相当する遺物が出土している。先古典期中期には高さが20mを越すE3-1建造物がつくられた。その後、先古典期後期にはE3-1建造物を

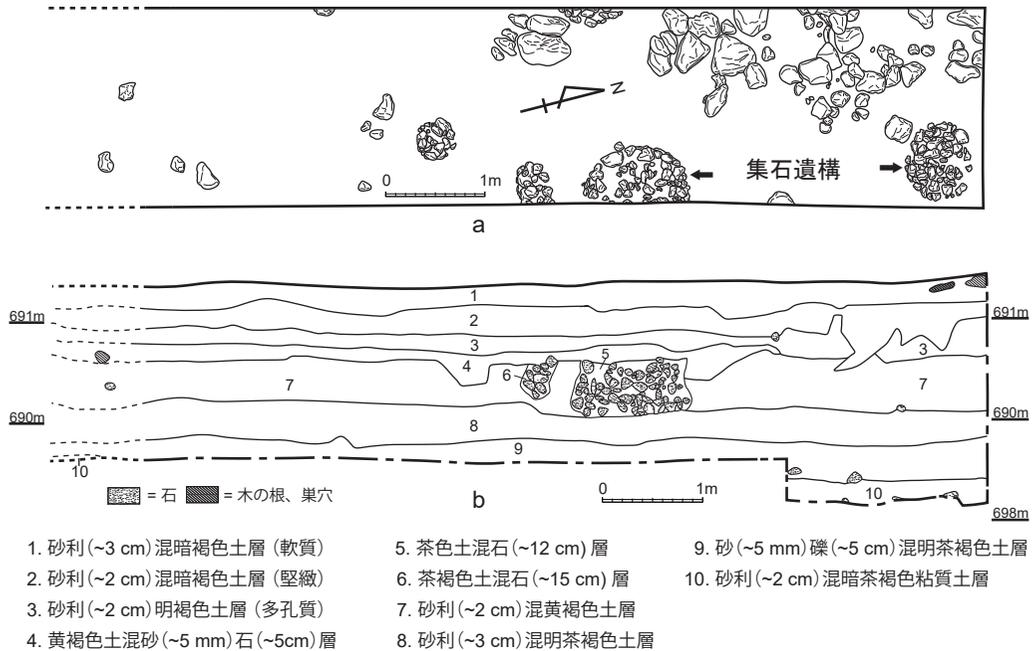


図6 8-1トレンチ集石遺構平面図・断面図

a. 平面図、b. 土層断面図

拡張し、更に、E3-2、E3-3建造物などをつくった。先古典期後期の後は、この地区での建築活動は確認されていない。しかし、古典期以降も何らかの儀礼などが行われていたようである。

チュルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区に位置するサン・アントニオ コーヒー園で、名古屋大学は2012年から継続して、考古学調査を実施している（図4）。そして、チュルチュアパ遺跡の先古典期文化に関する新しい考古学資料が得られている。2018年2～4月の第6次調査（2012-2018年期）において、7バクトウンの日付が彫られた石碑片が出土した（Ito, 2018）。

第6次調査では、E3-1建造物の南側の低い部分と共に、E3-2及びE3-3建造物南の低い部分でも発掘調査を実施した（図5）。この発掘調査前に行った地下レーダー探査の結果で石彫など石が出土する可能性が高いとされた地点に7-1と8-1トレンチを設定した。7-1トレンチでは、石彫は出土しなかった。8-1トレンチで第3層を掘り下げると（図6b）、数か所で集石が確認できた（図6a）。このうちの北東隅近くの集石から石碑片が出土した（図7）。他の集石からは石彫などは出土しなかった。時期を決められるような遺物は集石内から出土しなかった。また、8-1トレンチに拡張区を設けて（図5）、この石彫の破片を探したが、関連する遺物は出土しなかった。

発掘状況から石碑片が埋納された過程を以下に復元する（図8）。

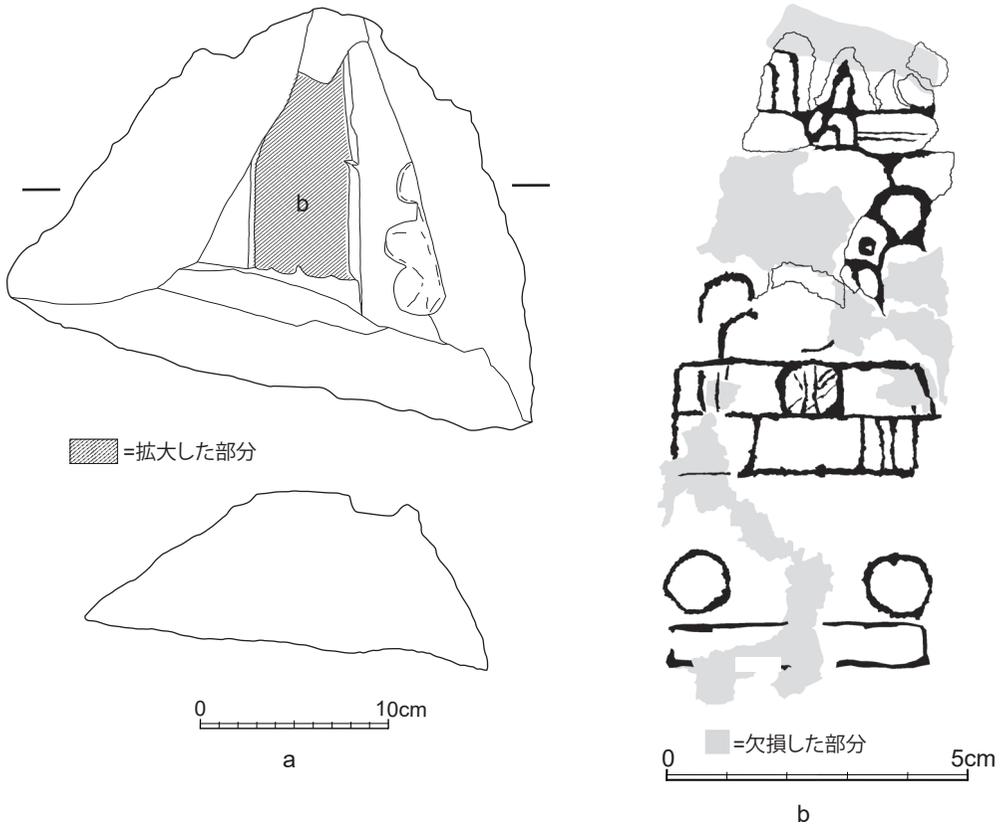


図7 7バクトゥン石碑片 (Ito, 2018, fig. 15を改変)

a. 平・断面図、b. 碑文拡大図

1. 床面に石などを埋めるための土坑を掘る。
2. ある程度の石や砂利を入れる。
3. 浮彫り面を下にして、石の上に石碑片(図7)を置く。
4. 土坑を満たすように石を入れる。
5. 土坑の上に、砂利を入れて、新しい床面をつくる。

床面に穴を掘り、石碑の破片をその中に砂利や石と共に、彫刻面を下にして埋納した後に、新しい床面をつくっている。このため、この床面に対応する E3-2建造物の建設の際に、土坑を掘ってつくられたいくつかの集石の一つに供物として7バクトゥンの部分を持つ石碑片をささげる儀礼を行ったと考えられる。また、E3-3、E3-4建造物の南側には同じような集石遺構はないため、先古典期後期、E3-2の南側を選んで他の集石と共に供物を捧げ、新たな床面を造成したと考えられる。

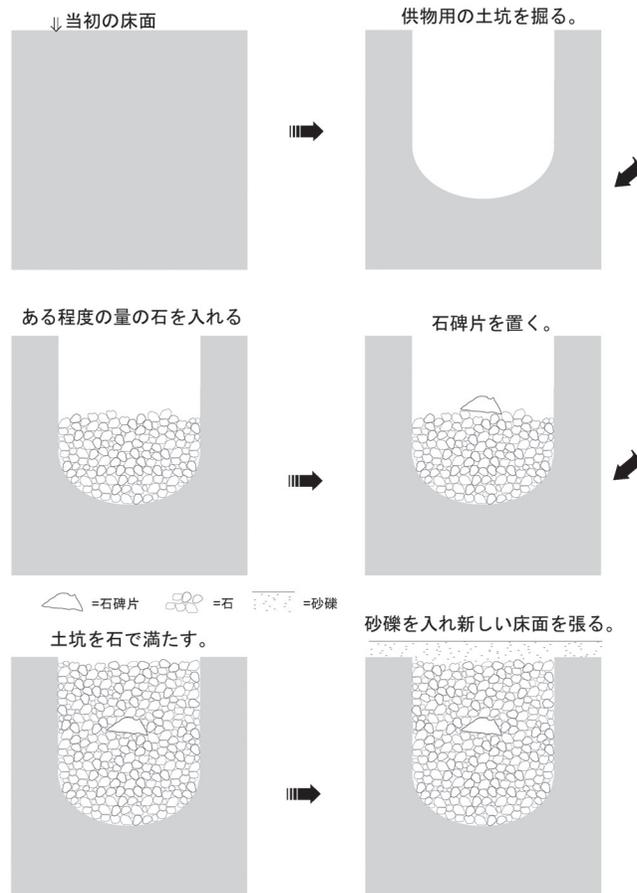


図8 7バクトゥン石碑片埋納想定図 (Ito y Stuart, 2019, fig. 3を改変)

#### 4. エルサルバドル西部出土7バクトゥンの石碑片の歴史的意味

##### (1) エルサルバドル西部出土7バクトゥン石碑片

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土石碑片は、長期暦の導入文字と数字7が線刻されている（図7）。イニシャルシリーズの導入文字は、横棒1単位とその上にある点2単位で示される数字7の上に確認できる。上部の鉢巻状部分上に三つ葉文が確認できる。三つ葉文は、中央に三角形の部分があり、その両横に外側に向かって曲がる逆U字形で構成されている。その下は破損している部分が多いため何を表しているかを断定することが難しい。しかし、残存部分を見ると、左下に丸みを帯びた部分を持ち、右側には環状部分が確認できる。この環状部分の上下には丸みを帯びた部分がある。更にその上には弧を描くような刻線が上の鉢巻部分にのびている。三つ葉文の下部分は、左下に顎部分、右上に後頭部と耳の部

分に飾りを持つ左を向く横顔を表現していると考えられる。この横顔の部分の下には、長方形部分が2単位重なっている。上の長方形部分の中央には円形部分がある。この円形部分の中央に縦に長い帯状部分、その周りには斜位の格子状文様が線刻されている。円形部分の横には縦位に、数条の線刻が施されている。一方、下の長方形部分は中央の円形部分はなく、両端の近くに1～4条の線刻がまとまって施されている。

以上を考慮し、チャルチュアパ遺跡出土の他の石碑片と他の7バクトゥンの日付を持つ石彫と比較する。トレス・サポテス遺跡C石碑と同様に、横顔部分を持つ導入文字である。この横顔は月の守護神を示していると考えられる。その上にある部分は導入文字に特有な両端の逆U字文を持っている三つ葉文である。一方、エル・バウル遺跡1号石碑は同様な導入文字がない。7を示す棒1単位と点2単位の上に彫られている文字が導入文字に代わるものである可能性がある。しかし、出土石碑片の導入文字とは異なっている。チアパ・デ・コロソ遺跡2号石碑については、導入文字に相当する部分が残っていない。

以下では他のチャルチュアパ遺跡出土石碑と比較する(図9、写真1a, b)。チャルチュアパ遺跡1号記念物は文字が彫られる部分を浅く柱状に浮彫りし、文字と数字は非常に細かい線刻で表現している。また、文字が彫られた柱状部分は2行一組で少なくとも4組ある。7バクトゥンの石碑片には、もう1つの柱状部分らしい痕跡部分が残る。2行一組であった可能性は考えられる。しかし、更に多くの行があったのかは不明である。また、文字行の右側には文字ではない浮彫りの痕跡がみられる。この部分は渦巻状であった可能性がある。一方、E3-1建造物の南側で、火山灰(TBJ)層下で出土したジャガー頭部石彫や1号記念物と同じ層位で出土した石碑片(図9c)を見ると、帯状に浮彫りされた部分に非常に細かい線刻が施されている(Ito, ed., 2014)。チャルチュアパ遺跡の他の石碑と7バクトゥンの石碑片には、浮彫りのみでなく線刻が使われていた。

## (2) 先古典期の長期暦の日付のある石彫

ここでは、7バクトゥンの日付以外で、先古典期の日付(～紀元後250年)を持つ石彫を検討する(図2、3)。先古典期後期の8バクトゥンの日付を持つ石彫は、合計で6例ある。メキシコ湾岸2例、南東部太平洋側2例、そしてマヤ様式を持つ石彫2例である。以下、順に検討する。

タカリク・アバフ遺跡では、5号石碑に長期暦の日付が2行ある(図2d)。向かって左側にあるa行には、8.4.5.17.11が浮き彫りされている。右のb行も、日付が浮き彫りされている。カトゥンに当たる数字が2若しくは3の可能性があるため、8.2.2.10.5若しくは8.3.2.10.5となる。また、2号石碑は、バクトゥンが8、カトゥンが6で、文字と数字は浮き彫りされている(図2b)。しかし、それ以外の数字は不明である(Schieber de Lavarreda y Orrego Corzo, 2013; Graham, et al., 1978)。



図9 エル・トラピチェ地区出土石碑拓影

a. 7バクトゥンの日付を持つ石碑片、b. 1号記念物、c. 1-1トレンチ出土石碑片

ラ・モハーラ遺跡1号石碑は、1983年に見つかった(図2c)。2つの長期暦の日付が線刻されていた。左側の日付は8.5.3.3.5(13チクチャン3カヤップ)で、右側は8.5.16.9.7(5マニック15ポップ)である(Winfield Capitaine, 1988)。ジュステソンとカウフマンは、実際にこの石碑がつくられたのは3年後と考えている。また、カミナルフユ遺跡11号石碑(図10d)の人物に表現される仮面と似たものを、ラ・モハーラ遺跡1号石碑に彫られた人物は着けている(Justeson and Kaufman, 1993; Stuart, 1993)。この石碑の文字部分は、杵もしくは柱状部分を浮彫りすることなく、文字が平らな面に線刻されている。

トゥクストラの小石像は、ホームズによれば、1902年にサン・アンドレス・トゥクストラでみつかった(図3d、写真2b)。8.6.2.4.17(8カーバン)を示しているが、導入文字に月の守護神は彫られていない。また、導入文字などの特徴を見ると、レイデン・プレート(長期暦:8.14.3.1.12.1; Morley and Morley, 1938)とコパンの石碑を結び付ける特徴をトゥクストラ小石像は持つとしている。また、トゥクストラ小石像は、メキシコ芸術様式を持っており、出土地点との一致から在地のものと考えている(Holmes, 1907)。マヤの表記法の発展史を推定している。一方、マークスはトゥクストラ小石像の導入文字がトレス・サポテス遺跡C石碑に似ているとし、260日暦の日の文字はマヤ文字に似ていないが論理的にカーバンとしている(Marcus, 1976)。メルジンは、トゥクストラ小石像の文字を同時期の資料などと詳細に比較し、先古典期後期の文字と考えている(Meluzin, 1977)。文字は、前後左右の面に線刻されている。また、文字は基本的に2行であるが、右側には3行目がある。

シーリーとミラーは、ハーバーク石碑の碑文を、8.8.0.7.0(3アハウ13シュル)としている(図3b)。文字は人物左には1行、人物の下には横位に2行で浮彫りされている。また、ダンバートン・オークス所蔵石斧に線刻された日付は、8.4.0.0.0若しくは9.4.0.0.0と考えている(図3c)。そして、文字の様式から前者の可能性が高いとしている(Schele & Miller, 1986)。出土地や出土状況は不明であるが、マヤ様式を持っている。

### (3) 先古典期後期の長期暦の7バクトゥンと8バクトゥンの日付

長期暦のイニシャルシリーズは、リースによれば、長期暦とツオルキン暦の日付から成る。また、イニシャルシリーズは先古典期後期に発展し、ベラクルス南部、チアパス高地、太平洋側斜面、グアテマラ中央部、そしてエルサルバドル高地に広がり、ティカルに至る(Riese, 1988)。一方、マークスは、メソアメリカの表記法について、カミナルフユ遺跡の10号石碑と1号祭壇を、のちのマヤの表記法の先駆者としている(図10a, c)。また、原古典期(紀元後50-200年)には、文字2行の配置が発展し、チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区まで広がるとしている(Marcus, 1976)。

長期暦の7バクトゥンが彫られた石彫は、メキシコ湾岸のトレス・サポテス遺跡1例を除くと、南東部太平洋側に3例ある。メソアメリカ全域で合計すると4例ある。また、先古典



図10 カミナルフユ出土石彫

a. 10号石碑拓影、b. 21号石碑拓影、c. 1号祭壇、d. 11号石碑拓影 (c. 伊藤 2001, 図3.2を改変)

期後期もしくは、紀元後250年までの長期暦の日付（8バクトゥン）がある石彫は、メキシコ湾岸と南東部太平洋岸の4例がある。更に正確な出土地は不明であるが、先古典期後期に相当する長期暦の日付を持っているマヤ様式2例がある。以上をまとめると、先古典期後期の長期暦の日付を持つ資料は、7バクトゥンと8バクトゥンの10例である。周期別にみると、7バクトゥンは南東部太平洋側が3例と多く、メキシコ湾岸は1例に過ぎない。マヤ地方北・中部には1例もない。しかし、8バクトゥンまでの日付も考慮すると、マヤ低地には2例ある。また、メキシコ湾岸の事例も増える。7・8バクトゥンの先古典期の事例を合計すると、南東部太平洋側5例、次いでメキシコ湾岸は3例である。8バクトゥンまでを考慮すると、先古典期後期の長期暦の日付は、メキシコ湾岸と南東部太平洋岸に分布の中心がある。チャルチュアパは、最も事例が多い南東部太平洋側地方の南東端に位置する。

以下では、7バクトゥンの事例のみに限り、その特徴をみる。7バクトゥンとされる4例のうちで、導入文字がある事例は、トレス・サポテス遺跡とチャルチュアパ遺跡のみである。両事例とも、上部の三つ葉文の下に365日暦の月の守護神が左を向いた横顔で表現されている（図3a、写真1）。トレス・サポテス遺跡C石碑は、ポップ月とされる。チャルチュアパの事例では、後頭部やあごの丸みから、左向きの横顔と確認でき、耳の部分に環状部分が線刻されている。しかし、どの月の守護神なのかは判断できない。また、バクトゥンのある文字行に注目すると、トレス・サポテス遺跡C石碑、エル・バウル遺跡1号石碑は2行である（図2a、写真1c）。しかし、チアパ・デ・コルソ遺跡2号石碑は、破片ということもあり、2行なのかは不明である。チャルチュアパ遺跡出土石碑片は文字行左に柱状部分があった痕跡がある（写真1b）。このために文字は2行以上であった可能性がある。エル・バウル1号石碑は人物が見つめる先に、2行の柱状部分を浅く浮彫りしている。柱状部分には浮き彫りされた文字行があり、外側の文字行に長期暦の日付が彫られているとされる。文字行だけを見ると、チャルチュアパ遺跡出土石碑片は、柱状部分を浮彫りしている点においては、エル・バウル遺跡と似ている。しかし、チャルチュアパ遺跡出土石碑片の文字・数字は、エル・バウル遺跡とは異なり線刻されている。チアパ・デ・コルソ遺跡2号石碑は、他の事例とは石材と技法が少し異なるようであるが、柱状部分がなく平らな面に線刻されている。一方、トレス・サポテス遺跡C石碑の7バクトゥンが平らな部分に浮き彫られた部分の横に、柱状部分が浮き彫りされる。その柱状部分には線刻が確認される。この部分は、横位の線刻で区画され部分的に文字が線刻されている。この柱状部分は線刻或いは浮き彫りされる途中であった可能性がある。浮き彫りされた柱状部分に文字を線刻する点では、チャルチュアパ遺跡の事例に近い可能性がある。

次に、先古典期後期の8バクトゥンまでの事例をみる。メキシコ湾岸ではラ・モハーラ遺跡1号石碑、トゥクストラ小石像の2例、南東部太平洋側ではタカリク・アバフ遺跡2・5号石碑の2例、そして、確実な出土地は不明であるがマヤ様式を持つダンバートン・オークス所蔵石斧とハーバーグ石碑の2例がある。以上を合計すると、6例ある。このなかで、イニ

シャルシリーズの導入文字を持つ事例は、マヤ様式の1例以外の5例である。このうちで、タカリク・アバフ遺跡5号石碑は導入文字があると考えられる。しかし、劣化のために詳細部分は確認できない(図2d)。ラ・モハーラ遺跡では、上部の三つ葉文は非常に装飾性に富み、その下には月の守護神が左向きの横顔で線刻されている(図2c)。さらにその下には2単位の棒状部分がある。棒状部分のうち下の棒には縦位の線刻が4単位ある。トゥクストラ小石像の導入文字は非常に単純な線刻で表現されている(図3d)。上部の三つ葉文は渦巻文が線刻されている。その下には、月の守護神の横顔ではなく、方形に区画されU字文とその中の右上がり斜位の帯状文が組み合わせられた文様が線刻されている。一方、ハーバーク石碑には、上部に三つ葉文、その下に月の守護神、そして葉巻状部分が浮彫りされている。タカリク・アバフ遺跡2号石碑の導入文字は、上部に単純な三つ葉文、その下に隅丸長方形が浮き彫りされる(図2b)。その長方形部分は、横位の線刻で二分され、線の上には方形部分が浮き彫りされている。ダンバートン・オークス所蔵石斧については、導入文字の全体は欠損部分があり不明である。

以上の点からエル・トラピチェ地区出土石碑片を分析すると、長期暦に対する導入文字は、月の守護神と下にある棒状部分の縦位の線刻があるという点では、ラ・モハーラ遺跡の導入文字に近い。しかし、浮彫りの事例も含めると、月の守護神はハーバーク石碑にもある。また、線刻で導入文字を表現している点は、メキシコ湾岸の2例と同じである。

#### (4) 南東部太平洋側の文字資料と彫刻技法

南東部太平洋側で先古典期後期と思われる石彫の技法をみると、カミナルフユ遺跡の彫刻技法と似ている。例えば、同遺跡10号石碑では、非常に細い線刻が枠に沿って彫られているカルトゥーシュ内に文字が浮彫りされ、その上部には数字が浮彫りされている。しかし、破片の最下部には文字が線刻されている(図10a)。また、下の人物の左には線刻で文字が4行彫られている。11号石碑の人物やその人物が乗る台にも線刻が施されている(図10d)。21号石碑には、部分的にしか確認できないが、線刻された文字が2単位ある(図10b)。また、1号祭壇・21号石碑にみられるように、カミナルフユでは文字は2行で表現されている(図10c)。同10号石碑は4行であるが、2行が2組あるとも考えられる。文字が2行である点は、エル・バウルやチュルチュアパとおなじである。21号石碑の残存部分からみると、2行の文字を線刻するために、浅く柱状部分を浮彫りしている。しかし、エル・ポルトンやタカリク・アバフでは、文字は1行に対して1単位の柱状部分である(写真2c)。一方、タカリク・アバフ5号石碑は2行であるが、それぞれ1行のものが並列しているとも考えられる。エル・ポルトンでは、浮彫りで文字列用の枠をつくり、文字は1行である。タカリク・アバフでも、浮彫りの枠の中に文字1行を浮彫りしている。一方、イサパ遺跡60号記念物には、カミナルフユ遺跡10号石碑にみられるカルトゥーシュの文字に似た文字が浮彫りされ、上には数字の7が

浮彫りされている。

#### (5) チャルチュアパ遺跡出土7バクトゥン石碑の特徴

チャルチュアパ遺跡出土石碑片の文字の特徴を以下にまとめる。

1. 線刻されている。
2. 浅く柱状に浮彫りされた部分に彫られている。
3. 1号記念物と同様に2行でまとめられている。
4. 三つ葉文、月の守護神、2単位の棒状部分のからなる導入文字を持つ。

以上の特徴を考慮すると、1の線刻されている文字は、南東部太平洋側ではカミナルフユ遺跡10・21号石碑、チアパ・デ・コルソ遺跡2号石碑、メキシコ湾岸ではラ・モハーラ遺跡1号石碑、トゥクストラ小石像にみられる。2の浅く浮彫りされた柱状部分に文字が彫られているのは、南東部太平洋側では、カミナルフユ遺跡21号石碑・1号祭壇とエル・バウル遺跡1号石碑である。メキシコ湾岸では、トレス・サポテス遺跡C石碑には柱状部分を文字のために浅く浮彫りしている可能性がある。また、このなかで1行に対して1単位の柱状部分を浮彫りする事例は、チャルチュアパとエル・バウル遺跡である。カミナルフユでは2行に対して1単位の柱状部分を浮彫りしている。3の文字を2行でまとめる事例は、南東部太平洋側ではカミナルフユ遺跡10・21号石碑・1号祭壇、エル・バウル遺跡1号石碑、メキシコ湾岸ではトレス・サポテス遺跡C石碑、トゥクストラ小石像がある。タカリク・アバフ遺跡5号石碑を2行と考えることも可能であるが、1行が並んでいると考えることも可能かもしれない。4の特徴については、トレス・サポテス遺跡C石碑とラ・モハーラ遺跡1号石碑が同じ特徴を持っている。また、マヤ様式を持つハーバーク石碑は月の守護神下の棒状部分が少し異なる。南東部太平洋側では、タカリク・アバフ遺跡2号石碑にみられる導入文字があるが、月の守護神は持っていない。エル・バウルでは導入文字らしい文字は無く、カミナルフユには長期暦の日付がない。

以上から、導入文字の特徴を除いて考えると、カミナルフユ遺跡と、チャルチュアパ遺跡出土石碑片の文字は多くの要素を共有している。導入文字も含めて考えると、タカリク・アバフ遺跡とは異なる要素が多いが、メキシコ湾岸と共有する特徴が多くなる。文字のみでなく、彫刻方法も考慮すると、カミナルフユと共有する特徴がさらに多くなる。このため、チャルチュアパ出土7バクトゥンの石碑片に最も近いのはカミナルフユ遺跡の石彫である。

## 5. おわりに

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で出土した長期暦の日付7バクトゥンを持つ石碑片を考察した。この石碑にはメソアメリカ南東部太平洋側、特にカミナルフユ遺跡と類似す

る特徴が多くみられた。しかし、先古典期後期にこの地域で中心となる都市であったカミナルフユ遺跡では、長期暦の日付は確認されていない。以前、カミナルフユにおける権力と抗争について論じたときに、抗争の結果として記念碑的な石彫が壊された可能性を考えた（伊藤 2001a, b）。カミナルフユでは、先古典期後期に歴史的な事蹟を彫った石彫などが壊され、その中には長期暦の日付と歴史的な事柄を彫った石碑なども壊されていた可能性がある。そのうちの数例が破片となって、1号祭壇、10・21号石碑のように、今日みられるのではなかろうか（図10a, b, c）。もし先古典期後期のカミナルフユにおける破壊が文字や暦を記録した石彫を粉々にしたと考えると、長期暦はカミナルフユで確立し、そして各地に広がり、その土地ごとの表現方法で記録された可能性があるのではないだろうか。また、今回の石碑片のような資料が新たに発見されて、メソアメリカ史の一部として組み込まれ、そうした資料が蓄積されて、メソアメリカの長期暦の起源が解明されると考える。

ところで、7バクトゥンに関しては、メキシコ湾岸と南東部太平洋側が分布の中心となっている。しかし、メソアメリカの暦に関しては、現時点の資料を考えるとオアハカ地方で始められた可能性が高い。オアハカでは、何故長期暦の日付が記録される資料がないのであろうか。メキシコ湾岸と南東部太平洋側では、長期暦の日付を記す媒体として、石（石碑等）が選ばれた。オアハカでは、朽ちやすい紙や木等を選んだのであろうか、それとも、日付を記す必要がなかったのであろうか。

以上のように、まだまだ解明すべき課題は多い。

謝辞：この研究の経費は、科学研究費補助金2017～2019年度 挑戦的研究（萌芽）「DNAを文化人類学的視点から読み解く研究」（課題番号：17K18525）、2020年度 新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究「メソアメリカにおける都市空間の創成」（課題番号：20H05131）の一部が使われました。

## 参考文献

- Ayala F, Maricela  
1983 “El origen de la escritura jeroglífica maya.” En *Antropología e Historia de los Mixe-Zoques y Mayas, Homenaje a Frans Blom, Chiapas, México*, editado por Lorenzo Ochoa y Thomas A. Lee, pp. 175–221.
- Coe, Michael D.  
1957 “Cycle 7 Monuments in Middle America: A reconsideration.” *American Anthropologist* 59(4): 597–611.  
1976 “Early Steps in the Evolution of Maya Writing.” In *Origin of Religious Art & Iconography in Preclassic Mesoamerica*, edited by H. B. Nicholson, pp. 109–122.
- Coe, Michael D. and Stephen D. Houston  
2015 *The Maya*. Thames & Hudson, Ninth edition, London.
- de la Fuente, B.  
1973 *Escultura Monumental Olmeca*. UNAM, México.
- Edmonson, Munro S.  
1988 *The Book of the Year: Middle American Calendrical Systems*. University of Utah Press, Salt Lake City.

- Giron-Ábrego, Mario  
2013 “A Late Preclassic Distance Number.” *The PARI Journal* 13 (4): 8–12.
- Graham, J. A., R. F. Heizer, and E. M. Shook  
1978 “Abaj Takalik 1976: Exploratory Investigations.” *Contributions of the University of California Archaeological Research Faculty* 36, pp. 85–109.
- Graham, John A. and J. B. Porter  
1989 “A Cycle 6 Initial Series? A Maya Boulder Inscription of the First Millennium B.C. from Abaj Takalik.” *Mexicon* 11 (3): 46–49.
- Holmes, W. H.  
1907 “On a Nephrite Statuette from San Andrés Tuxtla, Vera Cruz, Mexico.” *American Anthropologist* 9 (4): 691–701.
- 伊藤伸幸  
2001a 「南メソアメリカ太平洋側斜面の四脚付テーブル状台座形石彫」『名古屋大学文学部研究論集』47 (140): 7–26.
- 2001b 「カミナルフユの権力と抗争」『古代文化』53–7: 33–45.
- Ito, Nobuyuki  
2018 *Informe Preliminar de Quinta y Sexta Temporada, Proyecto Arqueológico de El Trapiche, Chalchuapa, (Etapa: 2015–2018)*. Ministerio de Cultura, San Salvador.
- Ito, Nobuyuki y David Stuart  
2019 “Chalchuapa: Capital regional en el occidente de El Salvador.” *Arqueología Mexicana* 155: 82–87.
- Ito, Nobuyuki (ed.)  
2014 *Informe Final del Proyecto “Investigación Arqueológica a través de Sondeo Geofísico en el Área de El Trapiche, Chalchuapa” (2012–2014)*. Dirección de Arqueología de la Secretaría de Cultura de la Presidencia, Proyecto Arqueológico de El Salvador, San Salvador.
- Justeson, John S. and Terrence Kaufman  
1993 “A Decipherment of Epi-Olmec Hieroglyphic Writing.” *Science* 259 (5102): 1703–1711.
- Lehman, Walter  
1926 “Jahuar aus Puerto Mexiko.” *Zeitschrift für Ethnologie* 58: 171–177.
- Lowe, G. W.  
1961 “Algunos resultados de la temporada 1961 en Chiapa de Corzo, Chiapas.” *Estudios de Cultura Maya* II: 185–196.
- Marcus, Joyce  
1976 “The Origins of Mesoamerican Writing.” *Ann. Rev. Anthropol.* 5: 35–67.
- 1992 *Mesoamerican Writing Systems: Propaganda, Myth, and History in Four Ancient Civilizations*. Princeton University Press, Princeton.
- Méluzin, Sylvia  
1977 “The Tuxtla Statuette: An Internal Analysis of its Writing System.” In *The Periphery of the Southeastern Classic Maya Realm*, edited by Gary W. Pahl, pp. 67–113.
- Morley, Frances R., and Sylvanus G. Morley  
1938 *The Age and Provenance of the Leyden Plate*. Publication 509, Contribution 24, Carnegie Institution of Washington, Washington.
- Orrego Corzo, Miguel  
1990 *Reporte 1. Investigaciones Arqueológicas en Abaj Takalik, El Asintal, Retalhuleu 1988*. Proyecto Nacional Abaj Takalik, Ministerio de Cultura y Deportes, Dirección General del Patrimonio Cultural y Natural/IDAEH, Guatemala.
- Riese, Berthold  
1988 “Epigraphy of the Southern Zone in Relation to Other Parts of the Maya Realm.” In *The Southeast Classic Maya Zone*, edited by Elizabeth Hill Boone and Gordon R. Willey, pp. 67–94.

- Saturno, William A., David Stuart, y Boris Beltrán  
 2006 “Early Maya Writing at San Bartolo, Guatemala.” *Science* 311 (5765): 1281–1283.
- Schele, L. and M. E. Miller  
 1986 *The Blood of Kings*. Braziller, New York.
- Schieber de Lavarreda, Christa y Miguel Orrego Corzo  
 2013 “Celebraciones del solsticio de invierno en Tak’alik Ab’aj: el ritual en el Altar 46 “Piecitos”.” En *XXVI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, 2012, editado por B. Arroyo y L. Méndez Salinas, pp. 919–930.
- Stirling, Matthew W.  
 1939 “Discovering the New World’s Oldest Dated Work of Man.” *The National Geographic Magazine* 76: 183–218.
- 1940 *An Initial Series from Tres Zapotes, Vera Cruz, Mexico*. National Geographic Society, Technical Papers, Mexican Archaeology Series 1. Washington, D.C.
- Stuart, D.  
 2004 “The Beginnings of the Copan Dynasty: A Review of the Hieroglyphic and Historical Evidence.” In *Understanding Early Classic Copan*, edited by Ellen E. Bell, Marcello A. Canuto and Robert J. Sharer, pp. 215–247.
- Stuart, George E.  
 1993 “The Carved Stela from La Mojarra, Veracruz, Mexico.” *Science* 259 (5102): 1700–1701.
- Thompson, J. Eric S.  
 1941 *Dating of certain inscriptions of non-Maya origin*. *Theoretical Approaches to Problems* 1, Carnegie Institution of Washington, Division of Historical Research, Cambridge.
- Waterman, T. T.  
 1924 “On Certain Antiquities in Western Guatemala.” *Bulletin of the Pan American Union* 58 (1): 341–361.
- 1929 “Is the Baul stela an Aztec imitation?” *Art and Archaeology* 28: 182–87.
- Winfield Capitaine, F.  
 1988 *La Estela 1 de La Mojarra, Veracruz*. *Publ.* 16, Research Reports on Ancient Maya Writing, Washington, D.C.

キーワード：フバクトウン、先古典期後期、南東部太平洋側、チュルチュアパ遺跡、エル・トラピ  
 チェ地区

**Abstract**

Un fragmento de estela con la fecha de Baktun 7, encontrado en El Trapiche, Chalchuapa

Nobuyuki Ito

En El Trapiche, Chalchuapa, El Salvador se encontró un fragmento de estela grabado con la fecha de Baktun 7 del calendario de Cuenta Larga durante la sexta temporada de Campo (Etapa 2012–2018) del Proyecto Arqueológico de El Trapiche. Este fragmento tiene unas características semejantes a las de otras esculturas del periodo Preclásico Tardío.

El mencionado fragmento muestra unas técnicas escultóricas en el siguiente orden:

1. Incisión muy fina como inscripción.
2. Columna en relieve para esculpido de los glifos.
3. Doble columna para plasmar la inscripción.
4. Glifo introductorio de la serie inicial (GIS), el cual constituye trifolio, patrón de mes y dos barras inferiores.

En las esculturas de Kaminaljuyu, Chiapa de Corzo, La Mojarra y Los Tuxtles se ha encontrado evidencia de incisión fina. También se observa columna en relieve entre las estelas de Kaminaljuyu y El Baúl, mientras que en Tres Zapotes parece que se hubiera esculpido una sección un poco alta para convertirla en glifos en relieve o incisos. Por otra parte, la doble columna se encuentra en las estelas y altar de Kaminaljuyu, El Baúl y Tres Zapotes. El glifo introductorio de la serie inicial con patrón de mes, sólo se observa en las estelas de Tres Zapotes, La Mojarra y Hauberg. Sin pensar GIS, el fragmento de Chalchuapa tiene más semejanza a las esculturas de Kaminaljuyu, mientras con GIS comparte varios elementos característicos de glifo con los de la región de la Costa del Golfo de México.

Keywords: Baktun 7, Preclásico Tardío, Costa Sur de Mesoamérica, Chalchuapa, El Trapiche



写真1 エル・トラピチェ地区出土石碑片とトレス・サボテス遺跡C石碑

a. エル・トラピチェ地区出土石碑片、b. 同拓影、c, d. トレス・サボテス遺跡C石碑



写真2 文字が彫られた先古典期後期の石彫

- a. チアパ・デ・コロソ遺跡2号石碑、b. トウストラ小石像、  
c. エル・ポルトン遺跡1号記念物、d. イサバ遺跡60号記念物